

共七卷

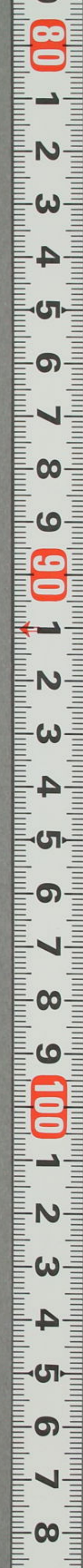
郭翁子玄



子玄

七

特別
~13
4370
7





玉うけ巻之七

○白嶺の神



河州邊を其那打所白嶺大明神のすかより後田彦
 を祭れるありと古の時天照大神をて侍祭る國
 狭長由五千餘川此より一階降り海の時此令以
 此事所て先づらて碇りしゆい。殊る切業所り
 かしや凡て神此を祭のてい。後の比良のふまかお
 松根此老樹枝をけし神聖なるびつと深なるも前
 海として四河流道河小茅水草生はけまのあ
 け小鬼馬岩岩のりく此水多流れありて群
 ありふくハカと中水玉や朝汐小面小紅糸をれは

人の世もた人もあ。皆代時をわねわねして同波を奉り此
い乃ををいつた。其深をたのらるる感念むを一か
す。大寺井の海色も一いつて。さきよもまのりか
神まひより。よたの香井八十町を中。海色し所りて。其
とて天晴日乃。さるる時ハも。南をさるるに。んもさ
笑れハ幸時乃のらね。かもしもがられし。んもさ
い江豊四北浦。をさおんゆ。海人北平。網代いす物
あま。い海もあまた。たごり。おれし。竹崎浮崎。海崎。其
かの。六井。天の交井。竹生崎もかもしもる。りのか
んもさる。絶景もおけく。か。弘治年中。接けの國
北平人。内崎の。い。人あり。或るつ。もづれ。意

学習れかまれあり。さ。れ。も。身。も。さ。ら。ん。て。負。案。あ。り。て
網。代。の。煙。火。ま。り。の。り。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
せ。ら。あ。る。日。の。ぬ。け。の。神。の。色。り。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
か。そ。の。あ。ま。り。の。り。の。神。の。色。り。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
あ。く。菴。殿。の。首。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江

吟。來。世。世。の。首。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
窮。乏。の。中。の。首。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
夜。朝。の。首。の。漸。級。を。用。由。初。め。の。首。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
に。あ。る。の。あ。や。ま。り。の。首。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江
ふ。ふ。は。は。の。首。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江

か。り。の。首。を。さ。ら。ん。て。あ。る。こ。と。あ。り。深。江



乃てくまを。嘉孝賤。棄て。辨者。末代。絶。因。既
報。難。み。て。告。所。に。所。あ。例。聞。明。神。人。乃
善。悪。れ。報。を。な。し。點。涉。れ。控。を。考。り。い。の。る。に。さ。り
り。の。報。ぐ。の。か。る。ず。得。や。あ。め。め。了。河。責。を。違。け。ぬ
或。最。強。冒。し。後。も。伏。し。て。こ。の。報。ぐ。の。い。昔。々。傳。來
乃。幸。を。い。し。喻。し。て。未。至。れ。機。を。い。て。あ。さ。さ。の。不。達
達。を。い。し。と。や。海。海。に。い。し。ま。て。拈。負。を。し。て。沙。水
の。活。代。當。り。因。多。つ。枝。多。ん。あ。ま。不。托。し。あ。ま。へ。を
志。し。ま。し。身。を。洗。う。ま。て。深。慈。を。賜。ふ。事。を。お。遣。遣
お。あ。げ。る。事。を。作。し。て。ま。り。し。ん
所。念。し。お。り。て。幸。社。に。階。下。お。か。し。こ。ま。り。す。ら。に。は。夜

通。あ。り。り。と。て。に。東。し。り。て。ご。ら。ま。ら。ぬ。お。は。回。席
の。お。ん。た。れ。末。社。の。文。お。い。さ。る。ま。で。皆。燈。明。ひ。り。か
や。ま。て。あ。ま。か。る。の。幸。責。れ。お。も。し。又。何。ら。さ。し。ん。の
お。入。さ。り。し。り。汗。馬。れ。と。せ。り。ご。音。を。り。る。の。さ。り。れ。ん
本。社。の。お。い。ま。り。し。ま。り。し。ん。ご。ら。ま。ら。ぬ。燈。明。え。り
も。ら。に。て。お。の。あ。や。め。ん。人。ら。ん。だ。あ。や。し。も。ま。り。し。ん。を
ひ。り。か。て。事。の。概。括。し。り。ご。ら。ま。ら。ぬ。お。ん。た。れ。末。社。の。文。お。い。さ。る。ま。で。皆。燈。明。ひ。り。か
ら。り。の。大。燈。折。列。を。あ。し。て。人。の。お。ん。た。れ。ま。り。し。ん。を
つ。ま。り。し。ん。を。い。さ。る。ま。ら。ぬ。お。ん。た。れ。末。社。の。文。お。い。さ。る。ま。で。皆。燈。明。ひ。り。か
お。ん。た。れ。末。社。の。文。お。い。さ。る。ま。で。皆。燈。明。ひ。り。か
の。盡。し。り。し。ん。を。い。さ。る。ま。ら。ぬ。お。ん。た。れ。末。社。の。文。お。い。さ。る。ま。で。皆。燈。明。ひ。り。か

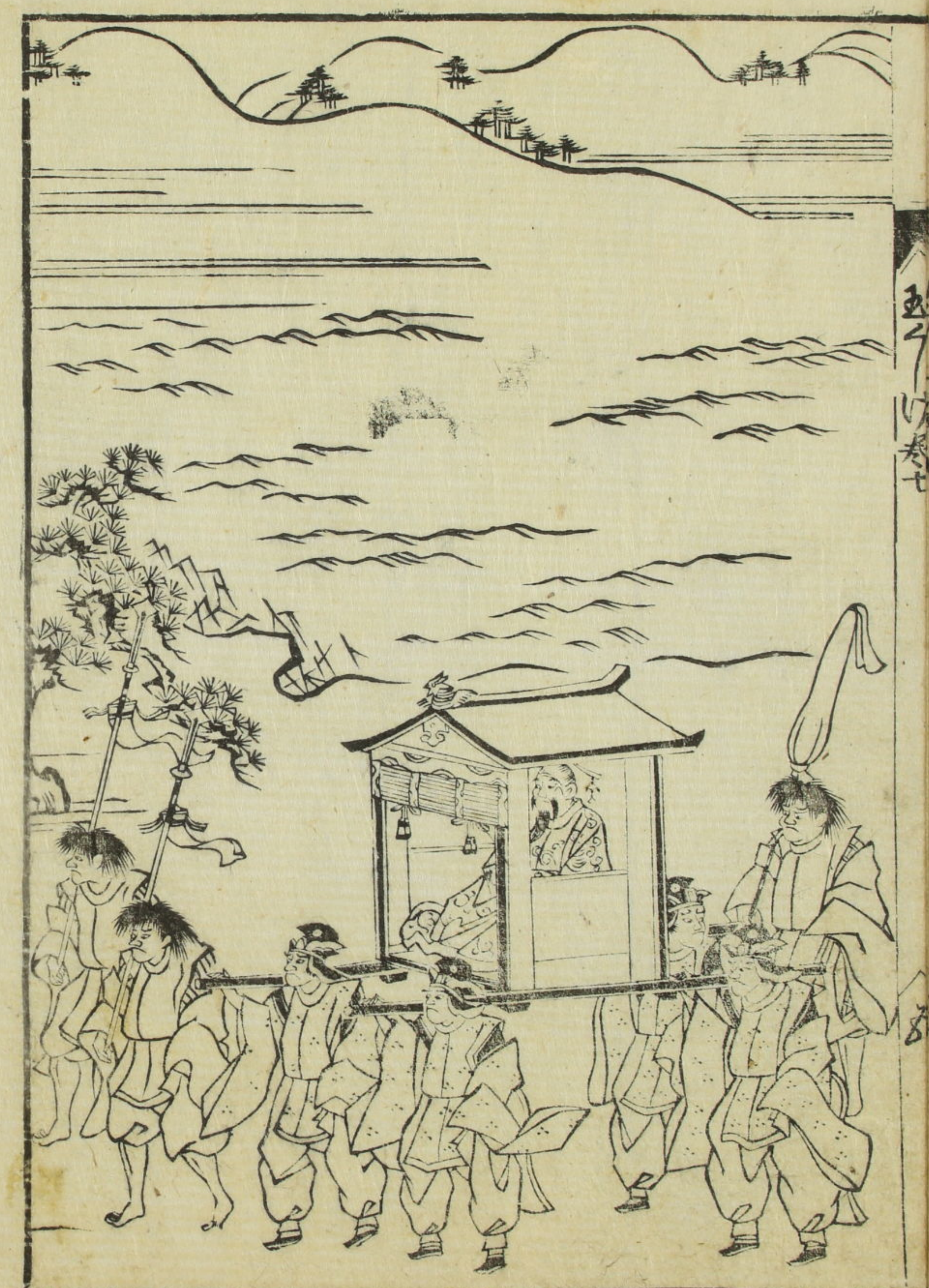
一六二

二



五ノ下ノ巻二

六



五ノ下ノ巻七

八

嵐越を焚くして。その時命を逃し奉り三十年あつて
かひつらに疾病のうれをうしむ。又一人のいづく東近江信永
殿の御舅家へ歸姑ふはくして孝のを盡す。その夫高の
こゝろ他國へあり。その為めはあつて姑おりき病ひにかれぬ。
祈禱し醫者を探して書せし効なし。婦人ふかあしと
おげき。齊戒沐浴して香紙焚きよれし。この里で
身代りしとて姑の命をすらん奉り給ふよ。よれぬ疾
をあらわして姑の命をよすけ。又その婦人貴子二人を
生めぬ。皆よく父母孝のを盡す。林蔭傳もあつて大
家へもばく入俸保官位次第に増進し。子孫あぐ富
をい保てまじ。又一人はいつく佐和山の威代官職の人。その

語勢よの過ぐれば信録にあらぬ。控威まことにあつて
志れども忠義のころいふ。あつてをなく。貪欲無たあ
て。物のあまれをうしむ。まじく貴令教十段を短しとあつて。
親をねよまげて公事をわらう。又ひらふ布帛此紙
をむさかのあつて。吾人を害して悪人の方へまれす
まじ。たおりの罪のゆゑにや。おりぬ。れが先祖の遺徳あつ
おろめて。まじりし。ゆるし。おまぬ。まじりし。罪悪。罪悪。まじり
は。まじりし。悪薄。録し。ね。親年。れ。は。は。必ず。滅族。の。禍。ま。あ
な。又。一人。の。い。づ。く。鏡山。れ。林蔭。来。而。性。田。地。給。十。頃。を。と
その家や富と事欠とまじ。まじりし。大。富。貧。致。逸。あ。つ
物ふく。まじり。く。懺。下。地。ま。じ。隣。家。の。田。地。の。わ。が。田。地。と。界

さるべしとてくまがたぬすもとのてかてしゆるん安ん
たふん孤かまじ或いをふの窮ふとらへ便りあき志何
れはの弱きをたて救ふあつてはの貧財四地を賤
く賤する。三まの徳をすかかにはやらず。さされ志意の
合へ懐くは奪く終へ病とらめて死しむ。され及の邪惡
をたててすもやに壽命は薄を削めぬ。乃世現
に非を化して半とらぬ。是前の家をせめてむ。れ及地
を償ふのそ艱苦かりハやと。れ及外もあくの神を
命の常るふ吾惡惡の裁ひを述べぬ。乃神はく
す。のいへ忽と起し甚くはる。越あつての。まふ。法神
おのく。そ。識をす。の。事。を。治。め。の。い。貴。罰。甚。的。か。あ。て

禍福名宜しは得。おとに遺。憾。な。ま。に。似。たり。ま。れ。ど。も
天地運の乃。救。生。靈。厄。會。れ。期。と。も。ぞ。ふ。い。す。の。國。統。御
に。裏。へ。共。乳。大。と。起。らん。と。い。法。神。お。の。く。を。歸。の。人。氏。氏
あ。れ。え。ず。か。償。す。の。ふ。と。と。み。大。臣。を。い。づ。の。ん。法。神
お。と。ら。さ。あ。や。し。と。い。の。故。我。心。の。み。法。神。こ。え。て。し。ん。さ。ふ
任。務。の。内。文。小。別。し。法。大。神。の。將。素。の。事。を。證。し。薄。し
を。小。を。や。り。の。か。あ。い。の。中。より。救。年。は。法。天。下。大。小。亂。起。る
故。關。年。止。時。を。能。僅。存。存。傷。を。さ。り。て。起。の。の。民。は。是
を。指。く。し。を。い。を。ん。と。い。の。全。川。尾。州。の。地。某。婦。人。氏。五。十
年。一。時。救。護。せ。る。べ。し。の。時。と。當。く。善。行。積。徳。を。積
めて。忠。孝。為。慈。人。の。あ。つ。と。ん。を。の。福。を。ま。ね。れ。か。て

尊卑人氏の社け嘉さけ極忍れ厄運しあるの。まをもた
 不便の目さふ何すやとてあ服小儀をうさる。法神
 五づいお願りて志をいひあをもちてまます。何
 ありてかろ大事りて掌れあうりてあ志のあし何と
 かしき肩をいりめ群をりてあゆのいぬ由縁ゆ
 階の下めて事れ始候をまてをられをのまおづ
 匍匐おこさきの新書をさげ。伏してあしをもち
 以神や志をいりてあをもちてあしをもち
 命とてかの新書をさげ。あかまうけあうらうか
 関のい由縁ゆ小向いのまふやう。あかまかひふ
 いふの後大いし獨ひあぶ。久しき貧困しきしひさふ

あしはと由縁ゆ恐れあうらうらあしを縁ふ
 明神かすて朱筆を執て大字ふにかれ文を簡あ
 して場ゆぬあうらうらあしを縁ふ
 木見新躍在由縁ゆかまあうらうらあしを縁ふ
 かくまうらあしを縁ふ
 おいりぬれを夜いあうらうらあしを縁ふ
 てかの荷をみるにまづあしを縁ふ
 お徳のたしあうらうらあしを縁ふ
 義木橋津身信長あしを縁ふ
 ぬめ。橋則伴丹れ城し指印をり。肉縁ゆが
 使をさしあうらうらあしを縁ふ

乃の幕布り上原へ知りかたれど、
 ぬ。又その以候は伊勢守とのみ志あり。あしびあき大剛は志
 あり。素敵の軍を懸公より鷹へ、
 武目政あらんて軍中へ
 解れく伊勢がうべをそんえふ、
 愈しや。内務めこれをまきくひらう、
 伊勢が首級そんやとおひ。白濱明神あましく祈念して
 か儀を来む。かくて戦場おあし、
 此のり先係甚重なり。まのめて電れ、
 つりて更ふ伊勢を定む。内務め、
 口も伊勢が面体、



伊勢守

廿

おりのけいげど伏一人忽然と暮まり内をぬくも伊原が
容態は毛文に海と教く伊原がある家小川でゆく
内をぬく伊原ありと海より入る。急いで見て伊原と
らとけぬおりの着をそのぬけもはゆわぬい丈もやらま。すか
らおれは伊原と日よりのてててててててててててててて
おれら伊原のい伊原と家小川の内をぬく伊原と
かまれせおれら家小川の明神のこりれを
りおれは伊原と家小川の明神のこりれを
録え龜の比やいもの天下一同に戦國とらぬ。幾由れ録え
あれは伊原と家小川の明神のこりれを
軍を起しと合戦ありと。橋州おれと好松永が堂新九の

一向宗は一樣増起し江州の朝倉津井井小敷山に
徒を起しと合戦ありと。橋州おれと好松永が堂新九の
あれは伊原と家小川の明神のこりれを
伊原と家小川の明神のこりれを
七月は伊原と家小川の明神のこりれを
一向宗は長崎は一樣を攻干ん
害を起しと合戦ありと。橋州おれと好松永が堂新九の
大寺井おれと家小川の明神のこりれを
りおれは伊原と家小川の明神のこりれを
て中を開退し先びりおれと家小川の明神のこりれを

甲比洗おほくかろ。一、御井退く一様は去たを目しりおんを
ろ。一、湯泡湯なるおかけりりかたに大まうらうらふれり。
一様は去た大いよりのをさうだらうけあしを城中あて
お死すまき物を敷ひれり。一子餘人思ひらうてと
さぶちあひひやと。おまのあがり。よき敵お引續てお死
まやとて。おあまこけんては去たは在候お目をうけて一文
おお切くかろ。この時信長公の執務十餘人を介ある侍
りくさくさこれより一様の去たを殺し人お死。のうらと百餘
人命おざりおきり。ねけ行さうては落るをさり。戦いし後
敵は死人をかきふるお五千餘人おあまの。内務のた
明神はのさし。一、半。皆お命を合せてり。ごうらとく。あざり

やたごし。ますく。奇突れおのいをさ。すまら。信長公
言上。一、半。坂崎。あし。れた。信長公。大。さ。内務。め。が。神。さ
おあひ。さ。事。を。感。ず。増。か。つ。お。ま。ん。と。ま。ひ。ら。
信長公。の。奇。お。れ。事。お。の。い。信。長。公。の。さ。ご。の。あ。わ。く
お。来。吉。凶。禍。福。大。事。を。向。の。内。務。め。こ。ろ。と。し。れ。信。長。公。は。言
を。さ。く。お。れ。え。下。れ。勝。人。間。此。事。お。め。して。二。月。此。禁。松。院。
大。お。て。一。回。此。活。札。真。度。皆。定。け。り。お。あ。り。て。後。易。お。へ。う。ん。
か。せ。れ。小。人。を。知。れ。さ。さ。さ。私。意。詔。書。を。さ。し。と。後。て。富。貴
和。道。を。求。め。ん。お。流。し。神。お。祈。ら。た。富。貴。を。得。ざ。り。の。さ。お
あ。ま。の。友。の。と。福。を。あ。ま。た。い。さ。か。る。さ。を。得。る。と。徳。を。得。る。と。天
命。お。の。せ。り。お。べ。り。と。さ。さ。さ。自。冥。か。り。と。長。久。永。べ。り。と。い。は。



山崎の戦

十一

法人皆くりの御小暇一信屋とる志おがうあしと也

○阿蘇北仙境

長谷川武敏大文とゆへ一國防北五内義隆小法之
又舊切ありしが大内の家を後の家周下れなり難へ改
道たぐしかす。或ア志むく陳言すとつぐむを則ひ也。
あく科小あふをさきざしあしたかおのむむどひりくふ中個
を去り不嫁ふつきく肥後國飽田郡小素子坂江にて
りりね或アえふ東岡素隱逸を好く我ひせしむは久
す。然をうづみ跡をかりしただも同花雪月ふくは清し
月日伝送るれづれもや年々一と僅かれぬあしあをさ

不の氷燈年人谷まの思とて風流れわる者あり。このこそ智
れ才ありふあしれぬ也。あ書連歎の心をよましく或アかも
とよまを字同れ事かど同ひらぶひ。は孫と志しとあ
らひまを或アを燈さしきく小智い内外あつむいよわ。
ふ友れらあまあきうとべあり時ぬ人活いあつとつとる。
おのくきひ小男子とせれ物れうあを弁へかづらと
け色都の因今ふの三信と。井は座北怪櫻北中のを
れどく外ふ大ちり年少藤ちり年あるをを志とん。
このまゝめて揚るせん口備しかむむや。いぶぬらんを河
をせ京路よのかりん山靈海をもあつひりり一聖れ思
いでふし。かりいづらむげし。文花れ便りうもせんか



五ノ川巻七

十一

あつんといふ。或アともかうもあつと志でぐふべしと。あ人がざり
かくうらるる。び語れ申意し。三人一不ふまの。京於ふのかり
ぬ。林本より初め洛中。れち。秘文ある。そ。外。海。外。家。持。寺
院。社。の。こ。び。お。び。ぐ。り。それよりきり。須磨。の。を。を。播
州。ふ。の。り。ぬ。の。不。室。の。は。ふ。或。ア。も。の。は。老。あり。は。れ。ぬ。
これ。が。も。に。に。ち。の。の。志。で。く。運。の。一。旅。の。は。れ。を。体。め
らん。れ。は。室。の。は。の。傾。性。所。ふ。秋。志。の。が。と。て。二人。は。控。お。の
り。か。か。る。ら。う。は。ら。う。も。あ。る。系。作。は。淵。え。す。れ。ぬ。海
宴。は。真。を。傳。へ。れ。だ。の。名。た。く。き。え。く。志。り。も。ち。ら。ぬ。を
心。を。か。さ。お。け。ざ。り。あ。し。集。人。も。あ。る。志。づ。れ。の。際。ふ。ら。ん。我
め。らん。海。く。お。の。い。と。も。と。志。の。び。く。ふ。け。二人。の。控。女。か。の。い

列。れ。ら。だ。び。り。さ。あり。ま。に。に。び。の。あ。さ。け。か。ど。ら。ひ。い
や。海。は。び。の。系。城。も。と。ふ。じ。も。ぶ。海。の。海。も。あ。と。で。や。び。び。さ
う。ら。せ。び。ひ。す。す。極。び。殿。や。わ。だ。ん。ゆ。う。も。ん。の。合。銀
乃。う。び。つ。の。幕。が。一。ぬ。ぬ。ひ。り。ふ。係。り。合。せ。或。ア。ふ。合。ふ。武
移。ぬ。づ。傳。り。て。お。あ。く。お。す。い。あ。り。ひ。の。或。ア。と。し。め。の。か
が。い。海。を。ぐ。も。と。志。で。あ。ら。る。あ。ん。の。り。く。肉。ふ。の。ひ。ご。り。ま。を
あ。や。し。も。う。づ。ひ。き。ま。め。ら。れ。ぬ。瀬。所。ふ。か。の。あ。て。で。あ。わ。ら。か
或。ア。ち。ふ。お。う。ら。ま。あ。ん。を。ま。の。た。つ。ふ。び。や。志。で。ら。あ。あ
つ。の。總。國。の。及。ふ。お。や。れ。ら。を。さ。う。う。に。び。え。く。れ。合。銀。を。手。え
か。ふ。と。あ。く。さ。海。の。改。の。事。も。あ。り。れ。極。め。い。及。は。は。ら。り
相。を。か。ざ。り。て。お。ん。こ。り。の。あ。さ。け。ら。う。か。ん。ぬ。れ。ぬ。り。れ。心

富りあるのさうく仲あつてり時とあらんも一歌をもちて
流るれらふつまふひのなをまらふらふらんとたか
世もあら一人おのれにたかたけあしやがへるあやし世よ
のまに本心をうごめれ材をつつやも事あるらふさふ
あしづれもやうのちもあらぬとら友れ交りをもむ
あかまやまらなふく一そ陳れぐやいあふまふもま
人らをあしとあをうつとく放時ある金うびたふ
我身しひがひあくさつとあくしくあ人義理しぬる
めんかおのくみの素子れけ末をばおひぬむやあひが
くあさあれたあ人ふらあまのたまがけけひて
あかへあひさかをあら。日物とそすあひらくおひ

とほりあんのあれとく或やよろこびく酒肴とら
あふ小すえん。さうはかふるあふもあひあさるあ。
ころ一在國へむらんのあ人いふあまころあゆの。さ
あごすう一旬半もあれをさうへるあ人やぐてあや
よああつてそまらん或やさうくもあくもさうてま
そらつてさあぬ。のほあ人のあかあひあひあふあ
あまのあまもさう。後あはあまのあふあはあひ
あ一在國へむら。かさひてあまをさうして一ああ
あまもあ。あ人あさう。あまあひの。或やあ人あひ
てあまてあふあふあ。あ人あまあまのあひあ
もあやうちああまあ。あまあひあひあひあひあ

れらぎれうらうすぎぬ一りきくかたら輝け笑をとらへ
 びりけんもちりけんしど或一因又後がわたりる上流を
 がぐーがひてゐるかだしやうさあしうとと用ひのさざりー
 了れうそてくれさわがづさのこあげさあふあそとて。うが家
 ぶんをうらせ衣服浴飯などなすせ。衣服をぬぎうを食
 物などあへく移んごらふつうのりれ。あんなもぎをが
 りがとまがく衆愚めして悉れいさを身いむどあるを
 辱ふあつものあつびあつび悔めあひる。されを悉ん
 いさめあだごなす。あつてうらうらうの控女れん振るあ。か
 してうがあしうしあつけをまそと。あひれんふうくもあ
 りいさる。おれ財を費しえたがひー子代もかまじ

少いらきりーふ。つうとあくあふおとらへられぬ。治家お
 ちぎさうくののらふたけらーさしおばさんかまはせんこ
 かまふられてあつて在國あへらんとせーうひの目せそ
 二のあつてのがごのむとてころなす悔ふあつてやかの町ふ
 いあーふ。二人の控女れのやう一家の老いあつてあわく
 ーあひーらまじさうーまなとーひれだあつて
 ころののーうとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
 りもや折果しつてうらうらを散ぜんやあひーつた。さ
 すがあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
 侍とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ
 かるむさき風俗といかゆてもあつてあつてあつてあつてあつてあ

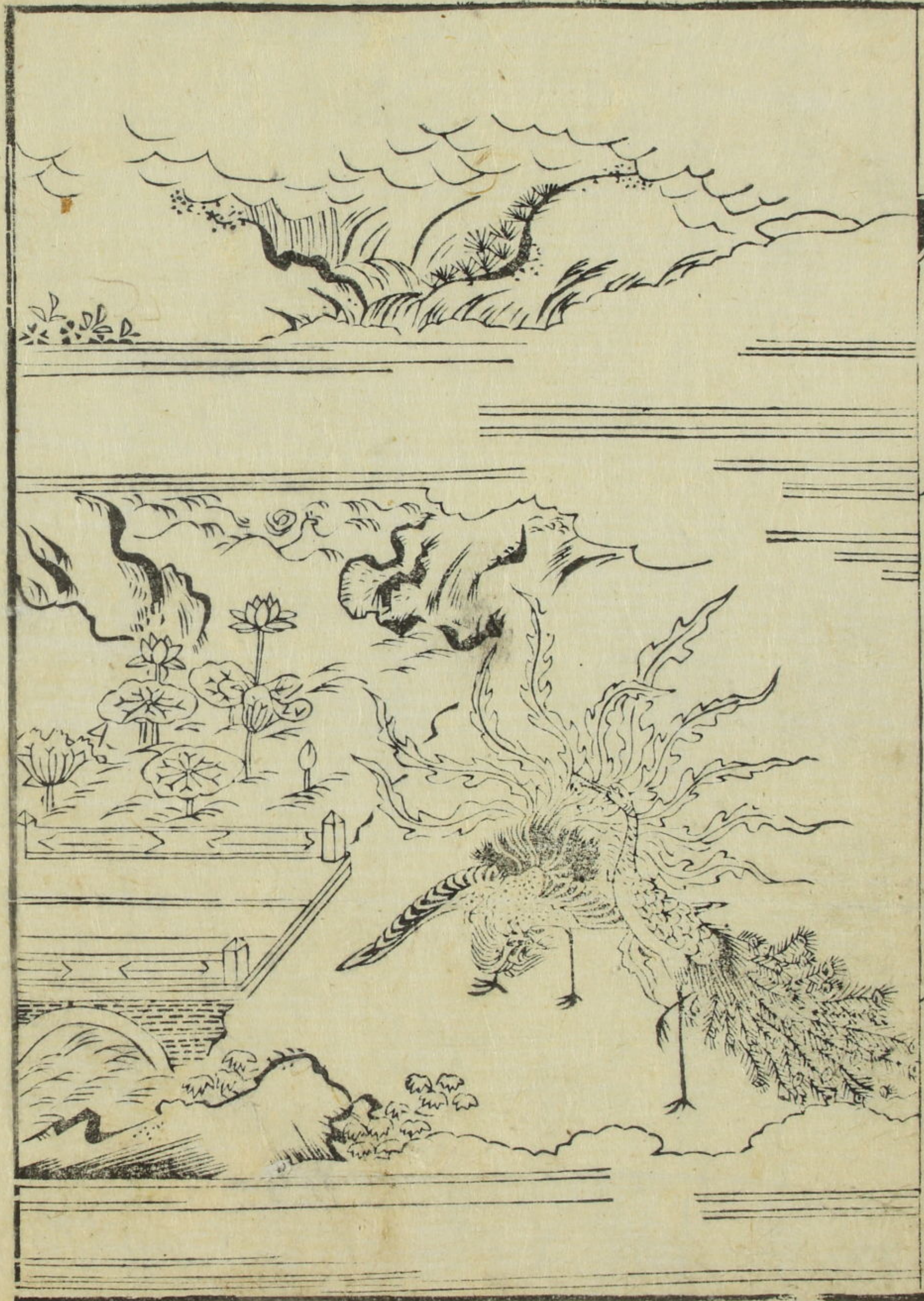


うしゆり申うあしんだ。人ハ命をうり大切なるま。
かまへし短きものころを報。あつよのあぢりふ
家をあやぶめ。いづれか。いづれか。いづれか。
の。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
す。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
を。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
た。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
か。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
げ。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
此。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
きて。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。

涙神のうらををのされども世の事。き日めく。こころが
きもの色欲。小きいな。かの友人。その。あつよの。
あつよの。あつよの。あつよの。あつよの。
いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
乃。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
の。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
か。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
の。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
ふ。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
り。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。
れ。いづれか。いづれか。いづれか。いづれか。

海にむるしくなるのぬまき思あげきあがり葬られた事大
 丸満るかい野の世の送りのをいともさるるにひしり花女の歌
 小ゆりても。とひおやしーろさもたのしさをせうせうよろろ
 あぢきあく地がわしく浮世は改まるともてりれど。あぢ家
 斗一粒の飛ともなり。かつと隼人が善提をうもことば
 やちぢいといまげれ衣雁刀はたひのうず怪ぬの一あふ
 くらりあえん。とととアさりり飛しよあぢれ室をさり法
 國を修の。アさやとれこももあくゆふい。ととあぢ後
 ちりり年流る元龜北末の年まも出の修のつぞ。
 肥後子立紙が故編れ方なりく。あぢびくまびり怪一
 家を修の。ととと子親族いらくまあり。あぢもあぢはあぢえ

危ふい草のともとさがり。海ととも人となり。アさり
 ありくちうーとぞれあふりし和功さ海を深
 あり。されど時らうらぶ人れとがひら津とやと。それあり
 ずい何蘇れ深谷を急ぐあも忽白れ山より白つや
 かる衣をまきて。野のあぢき宿まをいつさき。あぢ
 小此のとあまふらり人ありなり。あぢくをづくをかんれど。
 ひしれ或アなまめてぞありなり。つたこれいふふとゆあ
 ち或ア入たぐひをさりいふあひししくとも。まれしあ
 あさきりりて志をまけと年久し。朋友れらぎりあ
 さうび。とあひるるうらうれとつた入らもよらび
 むうれ事えうらあぢ。まげあぢとれありのさあぢ



あやしくもたのめられ。たもいりたる事ふや新しくか
ありのまの人の心を或るこころとされども。これい
たむけ阿蘇北にぞ移びく。四方を彫望しる。所ふつ
とともゆく。容儀はこころも。喜良の喜子あり。これ汝天推
無為の采を欲しむ。これ小きさぐい。未れくとのこまふ
すか。しらあともいひ。童子もれ小とりついで。あやと
さしと。嶽さ。岩をすけ。水をとり。あやむと
あく。走るとも。あくゆく。なげに。まろく。平地ふつりぬ。これ
と。とりんと。せ。日ご。ろ。す。も。あ。よ。な。ぬ。所。あり。翠。の。中。に。花。の
京。す。所。を。り。と。人。志。げ。ゆ。に。中。に。小。河。あり。と。末。ふ。は。石
れ。橋。ふ。か。り。中。に。移。の。た。太。ふ。金。蓮。花。咲。き。な。れ。花。の

ふ。何れ花やらん。さ。や。う。と。ま。う。ぬ。木。れ。枝。小。き。ら。き
花。を。さ。り。と。人。志。げ。ゆ。に。中。に。小。河。あり。と。末。ふ。は。石
れ。橋。ふ。か。り。中。に。移。の。た。太。ふ。金。蓮。花。咲。き。な。れ。花。の
と。とりんと。せ。日ご。ろ。す。も。あ。よ。な。ぬ。所。あり。翠。の。中。に。花。の
京。す。所。を。り。と。人。志。げ。ゆ。に。中。に。小。河。あり。と。末。ふ。は。石
れ。橋。ふ。か。り。中。に。移。の。た。太。ふ。金。蓮。花。咲。き。な。れ。花。の

あやしくもたのめられ

あやしくもたのめられ

かり名もあつねもまうらうりき多どもおかりるき音証
 晴りりのあつね小翔り霧ふすづく花本山あれありま
 月れどり小風あつりめく孝ふ二三月れ下し喜まされ
 お白ひ世生得無欲法澄みく志をも服ふ小信あり。
 天帝れれ海徳を照鏡しゆいしれを法りり運
 一じさぶめて飢くんとそ。胡麻飯柳花居ちどあそ
 ぬふれ味い甘みありくろのあふふあべ。これ
 これあり神さきやうふ才悟うく収ふもろがし。
 流ふ長生ふ死の術を得。氣を吸ひ風ふありて天
 地のあつねを道遠す。そのれり東河内由生駒山の奥ふ
 二也珠宮仙館ありく相害神人孝小権殿志あふ

取あり。志しれ小あつて風縁あり。いぎ奉の人とて。村小
 小のりくくあつね。後あし虫入るも吹待切通と伝
 人とあり。或アともらとも白紙くをありやうく生駒
 山小りあふ。そのりも安秋志那れ村人たよく知り
 ころやまの村中早冠れぐれある時ハかあぐれありのい
 のふ。あのもるすもやうあて大西志まり小海りる。立穀
 実のりあつり。村人まきりく伏作して。歳時
 おハ祭礼執りひ。子孫しれ入くおとさくばとふ

○鬼邪入袖中

毎作ふは山城と茶所對馬守を継が家信。思案全作



が男あ節の長八んぐりの心ゆふとく身あれきまめ
 て大かあしく岩を礎をき竹柱をき生得暴悪女所
 山野ふむせに休しあく偏浄を事やうし志く馬小
 ありて西原山石を底しうを川流泡をうり事
 得よのあて身ゆふかけ廻り。毎々麻糬た糺いんそ
 とくあくちんそ。海小か人者を寄あて河原を備し。
 碎ねれあまのふい人れ婦女をむびやうし。又いすういそえ
 臆ごりすうををにくそてきりこりし突倒しとくあひ
 身どりの。又平生相撲をねくも色れ佛閣社極小太
 入りし恋堂をあてし相撲を始めあは法の伝合紙
 ちや倍ゆををよびいすう喜はるし或は所中小様り

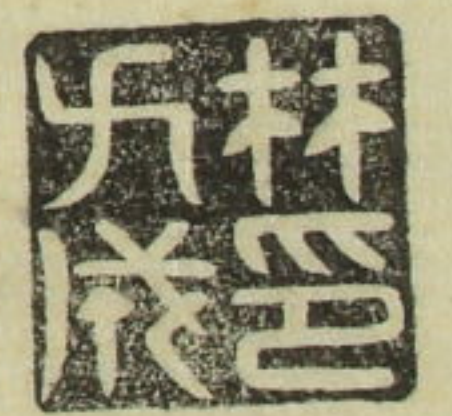
てすうのあやふ不ふ筋ねにあね、あやふ意あ節ちちりのいさこしあ
らめ河東柳あひま程あ化か後ご面めんあのいん欺あかれりりのいあうれ
そくちをいりりたらばあつめとあらくれどのちかみを
しまのありて神かみのちこらわらむあ節ち神かみ打うちの
披ひりたれんのいりきよくならばいちごろん地ちをいの
乃すとももまかりしがあらむ節ちこれより胸むねをいり
腹はら張はりて苦く痛いたむがつと五ご體たいまり割きぐどし阿絕げつ腦ねう亂らん志し
て人となりかるやらむやらすけのいとし。百ひゃく日じつか
りあらむきもぐつておい死めれたらんらり
玉たまくしけを之を七しち終しゆう

跋玉櫛笥後

余嘗觀李氏剪燈餘話酷喜其紀事之恠奇有托此
喻彼者有假名寓意者鬼幻百出信筆美文連目讀
之而不知厭竊嘆以謂本邦州郡之廣近代干戈之
間豈無奇事異聞如李氏所述者顧世之著述之才
致不多傳焉余不自揣欲效顰編輯然慣倭詞之俗
習不知所以裁文悞然擲筆不復省者久之蓄念所
發不能自抑又摸釋了意師狗張子述以俚語此僅
所見聞近世之事實耳鄙陋碎瑣寧足比前人之大

作唯其措辭之間所以喻彼寓意者蓋亦有之以備
嬾人女兒之翫索題之曰玉櫛笥猶欲訪異搜奇嗣
出續編草藁未就姑俟他日云爾

元禄し亥冬十一月朔且



京

西村市郎右衛門

全

林

九兵衛

江戸

西村九左衛門

梓

同

半兵衛

